

十三、三月三日第三種郵便物認可
麻生路郎★編輯

昭和十二年十一月一日開始
第十四卷第二十一號（毎月一日發行）

川柳雑誌

川柳漫畫に寄す

柴谷幸二郎
川上三太郎
堀口塊人
細木原青起
前田五健
宮尾しげを
梶元紋太
小林不浪人
小寺鳩甫
池田永一路
塚越正光
森東魚
小川武

NO. XI VOL. XIV



にきび
とり

美顔水

▲ニキビ吹出物に 第一等の良薬！

ニキビ吹出物にこれ程よく効く薬はない
といはれ種々な薬や方法で失望された
方でもこの薬の効能には満足されます。

▲美容薬として

この薬は美容薬としても非常に優れた効
果がきり男子方にも婦人方にも廣く賞用
せられてゐます。



川柳雜誌特輯十一號月次目

川柳漫畫に寄す……………(四)

柴谷宰二郎 川上三太郎 堀口塊人
細木原青起 前田五健 宮尾しげを
相元紋太 小林不浪人 小寺鳩甫
池田永一路 塚越正光 森 東魚
小川 武

武玉川三篇研究(十一)……………(一五)

梅本 秋農屋
姪子 省二

川柳指導講座……………塚越正光……………(一九)

準戦時體制下の川柳……………阿部 佐保蘭……………(二七)

へそくり帳……………姫田夕鐘……………(二九)

屏 近作柳 樽……………麻生路郎……………(三)

川 柳 塔……………諸 家……………(二〇)

一 路 集……………(二〇)

汽 車……………福田山雨樓……………(三四)
恩 給……………酒井大樓……………(三四)

各 地 柳 壇……………(三六)

編輯縦横……………(四三)

社關係の人々……………(表三)

川・雜・案・内……………(四三)

川・協・の・頁

柳人素描……………(四〇)

(九) 村松 夢裡君
(一〇) 水谷 鮎美君
(一一) 加藤 文醉君

柳 界 展 望……………(三)

川 柳 書 架……………(三六)

同 情 週 間 師 走 川 柳 大 會

！いさ下てつ味を味柳川の末歳てし席出も方いなら作を柳川

支那事變勃發最初の歳末が近づいて來た。銃後の私達は
いよ／＼皇軍の武運長久を祈ると共に歳末に特に恵ぐま
ない人々のことも考へたい。こゝに本協會は師走の川柳大
會を開催し出席者の會費全部をそれ等の恵ぐまされざる人々
へ贈ることとした。オール川柳人の來援を切望す。

十二月三日(金) 自午後六時至十時
大阪市北區中之島二丁目 大阪朝日新聞社三階大廣間

司會者

後藤青兒

兼 講 壇 時
演 擲 時

(題未定) 川柳協會理事長 藤 青 兒
「集金」 福造・東魚・紋太・溪花坊・路郎
「人情」 麻生路郎
「噓」 路郎
「祝酒」 各二句

締切 十二月二日午後十時着 用紙官製はがき又同型紙各題別紙

住所氏名明記の事 大阪市西成區玉出本通三丁目三十六番地「川柳人協會」宛

投句所 選者 綠雨・東洋鬼・塊人・紳樂・百雷・京二・大研子・文久・麥魚

席上揮毫 川柳人・漫畫人の揮毫

即興漫畫 (餘興) 北 幹夫・竹中あきら

會 費 金 五 拾 錢

賞 品 大阪神外の出句者は兼題と共に小爲替卅錢又は二錢切手十五枚同封
のこさ、入賞句呈賞(會費同封なき句は選者に廻送せず)
念メダル贈呈。出席者全部に川柳マツチ(路郎執筆)其他粗品を呈上

記念撮影 希望者に賞費で頒つ。▼鉛筆持参▼なるべく靴又は草履のこと

大・會・委・員 (順序不同)

路 東 魚 紋 太 綠 雨 紳 樂 百 雷 丹 路 水 客
潮 花 里 九 福 造 新 水 魚 鐘 柳 秀 青 一 路 夢 郎 豆 か ぼ 秋
紫 香 亞 鈍 靑 兒 八 步 變 人 結 美 白 峯 柳 次 悟 郎 豆 か ぼ 秋
い わ を み つ る み き を お さ ん 南 濃 路

師走川柳大會事務所 大阪市西區筑前橋電停前
昭和ビル一號室(電土3333)

川 柳 人 協 會

主 催
後 援

大 阪 朝 日 新 聞 社 會 事 業 團

誌 ♣ 雜 ♣ 柳 ♣ 川

號一十第 卷四十第

麻 生 路 郎

銃後々々飲ますに辻で別れたり
君の椅子も護つてやるぞ征けよ君
赤澤待つ身抽斗整理する
水だ水だベッドは眞白きものぞ
云ふだけは云へ云へ若さ失ふな
君と僕と遂に遂に夜が白らみたり

細 木 原 青 起

私は川柳は素人である。其のつもりで聞いて貰ひたい。
古川柳は（全部とは言はぬが）謎を以て世相人事を諷したものが多い。故に漫畫が謎を解く形になつて何も漫畫も活きる。

ところが今日の川柳はお上品で舒景が多く。俳句に近いやうなのが大部分で漫畫にはなりにくい。諷刺があつても眞つ向から切り下し、表ばかりで裏がない。漫畫にしても句の説明になつて了ふから甚だ面白くない。

こんなことを云ふと川柳家諸兄からお叱りを蒙るに違ひないが、私は『日の出』に毎號川柳漫畫を書いて居るので、私の偽らざる感想である。其の爲に私は川柳漫畫の批判は差し控へる。

川柳家は上品な漫畫を希望されることと思ふが。しかし俳畫風では意義をなさない。滑稽に描いても、結局畫作者に依つて品の上下は左右されるものである。

繪になる川柳は矢張り古川柳のやうなのが欲しいと思ふ。大衆を對照としないならば是れは又別である。しかし川柳は滑稽詩であるといふ先入取が大衆から失せない以上は、大衆雜誌が桁はづれの漫畫を描いても止むを得まい。

要は川柳雜誌で川柳漫畫の行く道を研究運動することである。

前 田 五 健

當百、水府、鳩市の時事繪川柳、中央美術社發行諸漫畫大家連の漫畫大觀、路郎柴舟の累卵の遊び、素文の命の洗濯、浮世さま／＼、樂天の金言警句川柳漫畫等々其他澤山、各態各様に面白い。早く云へば漫畫と云ふより川柳挿畫だと私は思ふ。亦た川柳を繪にする、繪に川柳の賛する、其處に自ら二途がある、誰れだつたか「畫は山川草木、句は棚引雲霞の氣持でなくてはならない」と云ふ私も其の通り思ふ、川柳の質と描法は俳畫式とも、禪式とも、川柳畫とも川柳挿畫とも川柳漫畫とも成り、觀る人の描く人の關係により、勝手に名付けられるかも知れない。要は川柳を選べば畫も挿畫や説明畫でなく何んとか展開してくるものと思ふ、然し現在のものに對して不服はない。大衆向なら仕方もなく出版目的に依つてはあれでイ、のであらう。若し私が描くとすれば素朴に純眞に訥辯に描いて行きたいと思ふ。

宮尾しげを

最近の川柳の傾向ですと繪になるのがすくないので、繪になる句をよる爲につまらないと云ふ評を多く聞きます。これとはどつちの罪だか判らないですが、立派に句で叙景してゐるもの殊に風景などを漫畫にするのは仲々むづかしい事として漫畫家も骨が折れます雲がフワ／＼してゐて野原が太陽に輝がやいてるところを句によんでくられても漫畫的の挿畫には成りません、それを無理に漫畫的にする爲人物等を入れたりすると句者の氣持とそぐわず、お叱言ではかなわないです。講談社の雑誌に出てゐる川柳漫畫を素人は本格に思つてゐるが、これには川柳家諸士も大分反對らしい。あれは口をアイテ手をヒヨロ／＼とさせて購讀者を面白がらせればいゝだけの役目で、したがつて繪になる川柳ばかりを選つてゐるらしいのですから、あれを基本にしないで行きたいと思つて升。柳樽の中からは相當繪になる句が現代の句は成りにくいと云ふのが漫畫家連よく云つてゐる事です、諷刺と諧謔を忘れた俳句の様な川柳がふえたからでせう、但し漫畫を一ケの挿畫と見る時はこの限りでないです。

梶元紋太

川柳を利用して漫畫を描くことは工合のよい事だらうと思はれるが川柳の方から云ふと現在の程度では少々不足である描いて貰ふ宣傳効果より格を引下げられる悪影響の方が多いいで困る。それさへなければ漫畫化も結構である。漫畫になる川柳はどこか漫畫と相通するものを持つてゐるからこの餘りに近いものゝ中から生れたものは決してよい質のものではない。血が餘りに濃くなるからであらう。それを避けるためには漫畫らしからぬ漫畫を描く必要がある。句の逆を行く位の方がよい。

川柳も漫畫になるものが主體の様に思はれてゐる今日、川柳作家の自由さを發揮して何に主體があるかを明瞭に表すべきであらう。

その時こそ川柳漫畫を問題にする必要がなくなる。

川柳といふと和歌俳句より下位にあるやうな概念を持つ人が多い。實際すぐれた川柳もあるのだが、漫畫にも同じ様な事が云へる。そこで勝れた川柳にすぐれた漫畫ときめないで勝れた繪がついたら識者も再認識する事だらうと思ひます。川柳の場合特に眼につく事はまづい句にまづい繪が附合つてゐる場合が多いので正直なところ共倒れになつてゐる現状です。惡からず御解釋下されば幸甚。

人臭い川柳、人臭い漫畫、この兩者はどうやら結びつかざるを得ない運命の下に置かれてゐるかも知れない。それにし

塚 越 正 光

池 田 永 一 治

離しても生命ある川柳を作るやう努力して欲しいものである。



(小 寺 鳩 甫)

小 林 不 浪 人

川柳漫畫は川柳を川柳家以外の人たちに手ツ取早く認識せしむるには、効果百パーセントであると思ふ。

けれども之までの川柳漫畫は滑稽一方向的で、川柳の持つ本當の姿を表現し得ないものを多く見受けることを遺憾に思ふものである。此の點、漫畫家諸賢の御一考を煩したい。

川柳家も川柳漫畫の句を恰も刺身のツマのやうな存在にしか考へてない向きが多いやうだが、不心得も亦甚しい。漫畫を引立てるに役立つ川柳、そして漫畫から切り

でも漫畫家もつと川柳の本質を理解して呉れたら結構なのだが、遺憾乍ら私の知つてゐる範圍では、青起、千帆、しげをの三氏が、川柳を理解してゐると思へる位で、川柳漫畫で賣出した××氏に至つては、その認識を疑はなければならぬのが常である。川柳漫畫を描く新しい人達が××を手本にしてゐるのを見ると、眞剣に川柳を愛する私達は、にがにがしい事だと思ふが、漫畫の力によつて社會へ進出した柳壇だつたのだから止むを得ない。

森 東 魚

川柳と漫畫の關係では、私は、故人鳥平さんを忘れる事は出来ない。私のスポーツ川柳を共鳴して畫にしてくれたのは鳥平さんである。同氏の畫に就いて大體私の句作意圖に違つたものはなかつたやうである。要するに川柳の翻譯と同様、漫畫家がよく川柳を解する人である事が第一に必要である。其上の出来不出来は畫家の技倆次第と云ふ事に歸すると思ふ。

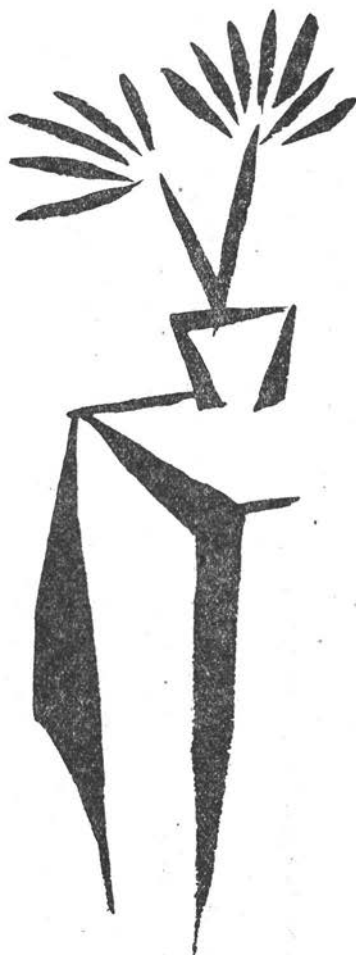
小 川 武

川柳漫畫は、やはり筆ですな、どうもペン描きの漫畫はホークで飯を喰べてゐるやうでピツタリきません。しかし川柳家が重爆機などの新しいものを詠んで繪にする場合さア筆描きノースロップは仲々むづかしい、鉛筆で下描きをしてはゴムで消し、チリチリとペンを入れるんでは、どうもガツシリした感じが出ない。

長尾のヲツさんかて筆描きですね、それにモボやアパートばかり描いてゐる漫畫家にとつては川柳漫畫は何よりの勉強になります。(或る漫畫少年との對話より)

樽 柳 作 近

選 郎 路 生 麻



病人の今日から箸を持つて食べ

大 阪

川村 觀月

二坪の畑に父の日曜日

同

赤だすき背廣を着てるのがさみし

同

父の脊をながすひとり子男の子

同

試験官の前で一ぺん咳をしろ

同

無我の境魚は釣れんでもよろし

同

めくらさんそままでいつしよに行きませう

同

子寶もよいが借家は見つからず

石川 鑒

勝山しとし

酒煙草のめて目出度く除隊する

同

腹癒せの一つに影を踏んでみる

同

又來たかなどと商人値切られる

同

戀人はないが朝の窓に寄り

同

聞き入れて呉れたが用をいひつける

同

塗りくちやの葉書でお米頼みます

大 阪

富本 無煙



表札と荷札と合つて一ツ減り	同	見込まれて書生當家の紋を着る	同	二階貸します猫の仔あげます	同	本日より松茸うどん夏終る	同	枝つきの土産武装の丹波栗	同	酔ふて來た父へ子供の無理がやみ	兵衛監 酒井美知夫	嘘半分までて人氣のある男	同	人垣の中に消防車の故障	同	満員車ダブルの組は乗りおくれ	同	次男百日の食ひ初め	同	食初めの鯛は小供に見せただけ	同	新刊書畫を抜く氣の返事する	同	立話軒へ段々誘ひ寄せ	今治 長野 文庫	立見席金が仇の世なる哉	同	外交は分に過ぎたる身の廻り	同	朝刊を待ち夕刊を待つ時局	同	今日も亦兄弟無事なりニュース切る	同
---------------	---	----------------	---	---------------	---	--------------	---	--------------	---	-----------------	--------------	--------------	---	-------------	---	----------------	---	-----------	---	----------------	---	---------------	---	------------	-------------	-------------	---	---------------	---	--------------	---	------------------	---

彼岸からかはるゝに風をひき	奈島監 嶋田 翠峯	夏帽も案山子となつて秋祭	同	洗濯で窓を塞いだ雨續き	同	日は西に沈む頃から釣り初め	同	濕布して秋の深みに賣笑婦	今治 月原 宵明	靴の紐結んでからは勤めの身	同	柿熟れてビュウンくつぐむ音	同	蟪蛄が賽錢箱を覗いてる	同	將兵祈願何様だろうと拜んどき	同	湯の宿の君一人なる化粧部屋	尼崎 酒井 斗風	晩酌の後は子供のいゝ相手	同	ふるさとへ無帽で歸る十年目	同	朝の陽に雀は砂に影うつし	同	晝にする船がついてる橋の下	大塚府 黒川 紫香	子の寢息夫婦あころ喰うとする	同	これだけで喰へと辭令渡される	同	見上げれば一つ開いてるビルの窓	同
---------------	--------------	--------------	---	-------------	---	---------------	---	--------------	-------------	---------------	---	---------------	---	-------------	---	----------------	---	---------------	-------------	--------------	---	---------------	---	--------------	---	---------------	--------------	----------------	---	----------------	---	-----------------	---



ボーナスを女給も期待してるなり	名古屋	稻垣 正種	支那事變病養ふ腕が鳴り	同
解釋を違へたまゝの口答	同	同	戦勝のラヂオ一本燭を増し	同
神聖な交際愛國切手貼る	同	同	寓といふ家にも兵隊さん泊る	大阪 北川 春集
新聞の受賣をして晝休み	同	同	三つ目のくさめ號令かけて出る	同
さんま焼く煙の中へ歸つて來	大阪府	大阪 形水	儲けたい改築儲けたなど見られ	同
一家團欒の後芝生に新聞紙など	同	同	取り巻かれ言葉少なの公用者	名古屋 平田 素天
歡送へ馬の下からも旗を振る	同	同	噴水のクルクル太陽の眞下	同
戦時には戦時の色で儲けてる	同	同	榮轉をして停年に手が届き	同
食ひ逃げの猫ふり返りあくびする	下 關	櫻川 不水	物賣をかへして寒い十二月	東京 野々村史葉
虫の音を聞いて勝碁は輪をふかし	同	同	客の子と炬燵で遊ぶクレオン畫	同
末の娘も銃を擔いでトテテター	同	同	日の丸に風ある朝が子に嬉し	同
飾り窓しやなり／＼と錦魚の尾	同	同	カタカナの慰問勇士を皆泣かせ	愛媛縣 岡田 浮草
氣味悪いまでに捕鼠器は七匹目	大阪	古寺謙南坊	千人針縫ふ間を背の子あやされる	同
口だけは働き過ぎる懷手	同	同	移轉してからも碁敵やつて來る	同
令嬢もよく喋るなり二人連	同	同	借りられる恐れがあつて敬遠し	長野縣 林 幹
有島を讚美しすぎてこはがられ	同	同	確めた電話へ重役やつと出る	同
張り切つて後家をたてゝる針仕事	ネノル	前山 北海	寝てからの風へ風呂場の火を思ひ	同



國難のうちに野球をもつ餘裕
松山 橋本 克海
疲れたる色で夕陽の沈みゆく
同
金力へ楯突くこともありたるに
同
交叉點喋る女が抜け遅れ
名古屋 鈴木 可香
鐵工所世は不景氣と思はれず
同
母の膳妻の膳にも秋の色
大版 岩橋 最美地
もう一段上で待たうと子等二人
同
分配へ集ふ一人前の顔
愛媛縣 米澤 曉明
教壇に十年兒童變るだけ
同
句はせた頭外出かと聞かれ
大版 野本 吞水
子寶を賞められ總領はまだ食へず
同
嫁ぐ日の近いお料理講議錄
東京 風間 花盈
貯金帳小僧だれにも見せない氣
同
自動車でさよならをする素晴しさ
大版 山本 葉光
恩返し別に少女は考へず
同
病院の窓がひらいたよい天氣
大版 毛利 稔幸
地圖の上日毎に進む日章旗
同

カフエーの亭主が征つて隙に成り
大版 石田 沐天
こんな傷ぐらゐと指は無かりけり
同
非常時へ俺のからだは細すぎる
下關 多田市他種
六甲へ一度行きたい夏を過ぎ
同
商談の果が二次會三次會
大版 米谷松太郎
いきなりに拳機先を制したり
同
子の足がドレスの尻を叩いてゐ
尼崎 山田南渡路
幸福に親を忘れる事久し
同
孫にやる金は巾着から出され
愛媛縣 由利 孝輔
臨檢の眼はタンツボへ迄とどき
同
表札は勳八等で歛を取る
廣松 藤牧 晤菴
交換手私用電話は聲低く
同
世の中へ出て鐘樓がなつかしく
大版 泉 流 葉
與ふるは幸ならず追加受け
同
縁日の錦魚子供の手につかれ
同 丸尾 潮花
嫁きおくれ其れでも母になる心算
同
荒み行く友なぐさめて酒にする
名古屋 星野 兄兒



機械場の話どちらも聲を張り
軍事講演マイクロホンがひびきすぎ
フィルムが一枚のこる二月堂
夏になり切つた會社の帽子掛
元氣だと便りとどけり戦死の日
利那主義考慮の餘地はなかりけり
サ克蘭ボしらじらしさの返事かな
發車ベル又ひとしきり旗が揺れ
發車ベルこれが最後の手を握り
稻刈の泥手へ芋を蒸して来る
父だけが二度目の母を賞めてゐる
國旗立てゝ日本を思ひ支那思ひ
柿剝けばたのし故郷の夢がある
敵前に立てば妻子の影もなし
奮闘の姿遺骨に見る涙
足裏へ秋を感じた夜の廊下
信心をする氣になつた不倖せ

同 大坂 正本 水客
同 大坂 高月 漢月
同 大坂 松枝 靜波
同 廣島 志賀 寧男
同 大坂 竹内美津枝
同 豊中 丸橋 松雨
同 松本 名越 新華
同 愛媛 酒井 肱水
同

月あれど山あれどいま君は亡し
青春も共にちびたる女下駄
レコードの唄へ末の子の踊り出し
三面の寫眞親子を引合せ
不平不満まだ／＼若いせいにされ
三度目の掛取すこし酔ふて来る
性格の一つなんでも黒がすぎ
ほゝゑみがあのほゝゑみが迷はせる
若き日のムツソリーニの非戰論
清廉と言はれつゝ後輩に追ひぬかれ
プロマイド買つて女房のまだ若し
馬占山狼狼振りを見せに出で
感化院今度來たのも罪の子か
巻煙草ひとりさびし吸ひつゞけ
こんな家あるかと思ふビルの横
頼母しい顔だと思ふ鐵兜
急行の風に動いてゐるトマト

松本 山田 善弘
同 大坂 今井 菊路
同 豊中 絹見 操川
同 大坂 難波南海男
同 尼崎 飯尾寄典史
同 神戸 西脇 提象
同 廣島 福岡葉留路
同 長野 勝部 海棠
同 豊中 佐二木千隈
同 長崎 金田 並木
同 兵庫 加茂 柳扇
同 大坂 田中 風葉
同 九龍 馬場 浪二
同 大坂 宮岡 公子



金持つて廣告すれば石も玉 大 阪 金 丸 隼 人

一日が来て神棚の神々し 廣 島 奥 富 天 作

酔ひどれの女給巡査も持てあまし 大 阪 谷 川 曉 香

戦場のニュースが過ぎる御用聞き 同 竹 内 春 坊

悪友はこんな隅つこまで訪ね 東 京 成 田 牛 若



観月君がトツプを切る。

いつもよりウンと巧みな句であることをよここぶ

「赤だすき」の句は悲痛な句だ。「父の背を」は子に

對する愛着の表はれを見る。「試験官の」句は莫迦

にしたやうなところが面白い。「無我の境」は達觀

した態度に興趣の盡きないものがある。無煙君の

「塗りくちやの」句は家庭生活の妻君のいぢましさを諷刺して妙である。「二

階貸します」の句はいか

にも長屋生活が出てゐて面白い。「本日より」の句

はうどん屋の季節の移り變りを捕へトツプを切る

商賣意識を巧みに表現してゐる。「枝つきの土産」

は技巧の妙味によつて生きてゐる句だ。無煙君の

見つけどころは豆秋畑である。

美知夫君の「新刊書」は書

生生活が出てゐてうれし

劇通が最下等席で觀るところに皮肉さを感じさせ

られる。宵明君の「濕布して」は椿姫を思はせる

陰慘味が出てゐる。「柿熟れて」も音響敘法によ

つてゐる叙景句である。

形水君では「一家團樂の後」は拘束されない表現

によさがあり、自由さがあり、思想の圓滿さを表

はしてゐるところが命である。不水君の「食ひ逃

げの」は人間の癩癪を一字も表現せずに、それが

遺憾なく表はれてゐるのが面白い。猫の人を食つ

た態度も出てゐる。

謙南坊君の「有島を」は古

句の「死にやば死にやな

どと、こわく母は云ひ」と共通的な親ごころを見

る。善弘君の「月あれど」は業平朝臣の向ふを張つ

てゐて、表現の大膽がう

れしい。

銃後には銃後の川柳が生れるのがよい。しかし

むやみにしほり出したやうな銃後の句は拙いばかりでなく醜い。春巢君の

「寓といふ家にも」の句などは、無理がないし、銃

後風景らしくて面白いと思つた。戦争の句はなんと云つても彼の地からの

句でなくては駄目である尤も實戦に携つてゐるから、みなすぐれた句であると思つてはいけない。

佳句を生むプロバビリティが多いといふに過ぎない。(路郎生)





武玉川三編研究 (十二)

梅 本 秋 の 屋
森 東 魚
蛭 子 省 二

(171) 色々に横を着て見る翌る晩

省 二 吉原遊びの「翌る晩」色々と夜着をきてみての夢うつゝの心地が抜けぬのも、若いうちの事だ。(この「翌る晩」は他に適解がある心地もする。)

秋の屋 此れは初めて旅寝をする場合ではない歟。布團の方ならば、吉原遊の翌晩とも思はれるが、横は夜着で蒲團ではない、上に被る物であるから、昨夜は能く眠れなかつたから、今晩はよく睡むらうと、横をさまざまに着てみるとであらう。

東 魚 翌る晩は何のあくる晩か分らない。「そのあした——」で分る句もあるが。此場合は色々に想像される。

省 二 「横」でも吉原關係であり得る事の例句、「吉原

中のそばを喰ふ横」(武・十八)

(172) 分別さかり北面の武士

省 二 院の御所を守護する役を、北面の武士と稱した。役柄から分別盛りの人々だと詠むだもの。

秋の屋 分別盛の人ばかりと想像されるが、事實には北面の武士に、青年の者が有つたのである。

東 魚 佐藤憲清の西行法師を、匂はしてゐるのではあるまいか。

(173) 物干へ薦の蹴落す蟬の聲

秋の屋 薦が物を掴んで飛翔する時、それを取落した調子に、物干に止まつてゐた蟬が驚いて、聲を立てたといふのであらう。

東 魚 辭句上から考へれば、どうも蟬が蹴落されて、

聲をたてたやうにとれる。或は鶯が高音に朗らかに、物干の上に舞つたので、そこに啼いてゐた蟬の聲が、爲に壓倒されたと云ふ事かもしれない。

省 二 鶯が蟬を蹴落すといふ事は、少しヘンにも思はれるのであるが、確に句面ではそんなに解せられる。適當な類句を参考にしたいと、探してみても見出さぬ。私は後日に迄保留して考へてみる。

(174) 下 戸 の 差 出 を 責 る 盃

秋の屋 酒盃を献酬する作法をも知らぬ癖に、差出る下戸は宜しく無い、と上戸が窘めるのだ。

東 魚 對手もし得ないくせに、といふ心持。

省 二 兎角、酒飲は下戸とそりが合はぬ。下戸は餘程話せぬものに見えるらしい。(イヤ酒呑は直に天狗になつたり、物識になつたりする)。

(175) 紅 紙 燭 夫 から 先 は 御 意 次 第

秋の屋 此の『紅紙燭』といふ物が判明せぬが、戀の句らしく思はれる。

東 魚 紅紙燭といふのは、痲瘡に灯してゐるのではあるまいか。「御意次第」は、紅い灯もつけて置いて、萬事赤づくめにして、先づよろしい。あとは小供の欲するまゝに、きゝ入れてやるといふ事かと思ふが、全く駄勞づくめである。

である。

省 二 私も最初は痲瘡かと思つた。『小供醫者赤い紙燭で送られる』の古句もあるから。然し「御意次第」なる語調が、秋の屋氏も申さるゝ通り、「戀」の意味があるかの如く響き、「紅紙燭」に他の用法がある思ひがして、考へさせられて居る。

(176) 涅槃像 あらゆる 泪 こほしげり

秋の屋 僧俗、禽獸、虫魚、草木に至るまで、釋迦涅槃に落涙したのである。

東 魚 「あらゆる」の措字が、まづ句の命とでも申すべきか。

省 二 「臨終をいろ／＼となく十五日」。泣く事に惜しき日つかふ涅槃像(武・十七)。

(177) 踊 子 の 名 と 同 し 若 黨

秋の屋 踊子の名も大吉、若黨の名も大吉。偶然の暗合は寡くない。

東 魚 ある女の源氏名を、競馬の馬の名みたやうだと毒舌を弄した事を思出して、この句に失笑を禁じられぬ。

省 二 お妾と飼猫とに、同じ名を附けてゐた、變態趣味者を知つて居る。句のは偶然の事であつた場合なのである。

(178) 葬に狐を馬の草履とり

秋の屋 狐を馬に乗せるとは、言ふことが散漫であつて信用が出来ぬに譬へていふのだが、朝顔の花が咲く早旦には、草履取の目がよく覺めず、何だか一向に譯の解らぬことを云ふであらう。

東 魚 旦那様は昨夜誹諧で、夜明しをされたさうだがお前は何時お迎ひに参る事になつてゐるのですか、など、奥方に聞かれて、草履取りめ辻つまの合はぬ事を申上げて早朝から油汗をかいてゐる場合であらう。

省 二 旦那の朝歸りで、草履取が詮議され、狐を馬に乗せたやうな事を、言つて居るのかと思つた。

(179) 一盛り二人の親を淋しかり

秋の屋 孝行のしたい時分に親は無し」といふ句のやうに、青年時代には、両親に苦勞をさせたが、漸くに身を立て、世に出るやうに成つた今日、両親は既に他界の人となり、實に心淋しいといふのである。

東 魚 一盛りを成功した時代と解すれば、前説の如くであらうが、一盛りを青年血氣の盛に、遊里にでも出入してゐるやうな意味とすると、両親はろくに喰ふものも喰はずに、面白い世の中を、つまらなく送つてゐると、淋しく思ふと云ふやうに解される。

省 二 「一盛り」は一時盛んなさまである。青年期のある

時代に、前説の如く道樂でもして居る折りは、両親を「淋しかり」は、物足りなく思ふ。

(180) 蘇生の隠居人に見らるゝ

省 二 あそこの隠居は、あの年で生き返つたさうなと珍しがられて噂さるゝのみか、わざ／＼見にくる者もある（蘇生談は甲子夜話にも載つて居る。昨年新聞記事にもあつた。高僧で蘇生した人の修養話もある。）『蘇生したかはりに臍がいほう也』（武・十二）

秋の屋 蘇生といふ事は、青年や壯年の人よりも、老年の人に多いやうである。

東 魚 蘇生といふのは、一時氣絶した位でなく、もう葬式の段取りにもかゝつた頃に、呼吸を吹き返したのであらう。「人に見らるゝ」は、あの隠居は一度死んだのだ、運のよい人だなど、噂され、外出の時見らるゝと云ふ意であらう。

(181) 枕の敷を持たぬ獨り寝

省 二 獨身なのだから、枕がいつも要る筈はない。

秋の屋 枕の掛替といふのも無いやうだ。

東 魚 何だか馬鹿／＼しいやうな句だが、何となく面白いやうに思はれる。どうも變な工合の句だ。

(182) そといふ文字を嬉しかる婆々

秋の屋 頭にその字の附くものを、婆が嬉しがるといふ

歟。不可解。

東魚「これも難解である。「そと云ふ」とは、聲をひそめて云ふとも考へられると思ふ。すると「文字」が變になる。或は「早く行きませうぞ」とか「急いで片付ませうぞ」など、「ぞ」を何かにつけていふ口癖の婆々と、いふ意味かもしれない。

省二「私は「そ」の字が頭に附く場合と思ひ、さて遣手婆々ではないかと考へたが、思當らぬ。——「文字」とあるから、口頭ではなく、手紙であらうとの説もある。

(183) 喰摘にことしの物はなかりけり

秋の屋「萬の物に新しいのを用ひる新年に、喰摘の材料には、白米、搗栗、海老、昆布、橙等いづれも、去年の物ばかりである。

東魚「新年に目出度がつてくふ喰摘ではあるが、さてどれと云つて新年の品はないと云ふ、ちとおどけた心持ちの句であらう。往年巖谷小波の狂句に、「百人首その癖年始の歌はなし」があつたと記憶する。其流儀である。

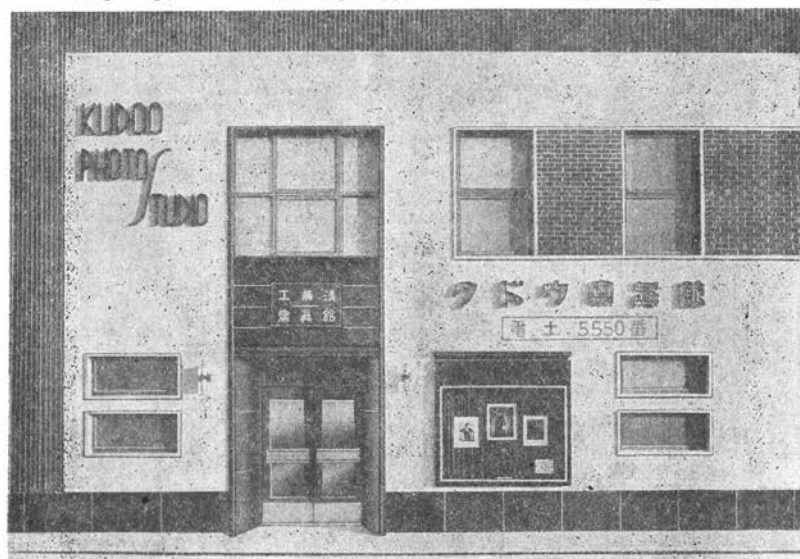
省二「堂上諸家では、闘斗鮑、昆布の二種のみであつたさうだ。

前號 (武玉川) 正誤表

(頁)	(段)	(行)	(誤)	(正)
一二	下	三	女子	字
一四	下	一五	消す家	爲
一五	上	二一	遣らす	遣
一五	下	一〇	と表現	と云ふ表現

寫場.....改築落成

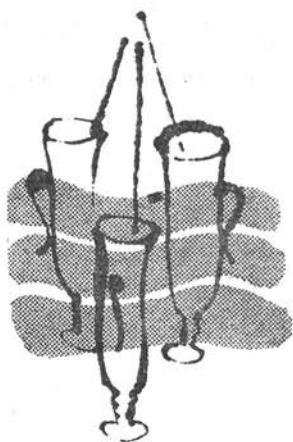
●技術本位で
キツトお喜びになる!



肥後橋父又點西
(朝日ビル一丁南西)

工藤寫眞館

電士5550番



川柳的概念とは？

川柳指導講座「風」

塚 越 正 光

今度の課題は「風」だが、東京の柳諦「川柳きやり」で私が最初に初歩添削を受持った時の課題も「風」だったことをゆくりなくも思ひ出したので同誌第十五巻第一號から第三號までを引げり出して見ると、それと同様のものはない。それは出題の時季の相違といふことも原因して居ようし社會相の推移や作家の環境の相違なども原因となつてゐるが、根本的には本欄の作家諸君が川柳的にすれてゐないからであると言へる。これが普通の課題吟だつたら、前に詠まれた句が可成な數に上ること疑ひないのだが……殊に「風」さいふやうな普通

的な課題なら殊にそれが甚だしい……それがないことは、諸君が川柳的概念にさらばれないことの表れでもある、が然し川柳的概念にさらばれないことが純粹なものとは言へないし、作品そのものの純化された川柳ではあり得ない。川柳の概念の渦中へ一度は没入して、そこから浮び上つた時が、ほんとうの作家自身の川柳が生れ出るのである。所がこの川柳の概念の渦は或人には鳴門の渦であり、或人には泥沼であり又或人には淺瀬でもあつて、却々浮び上れないさいふより一生かゝつても浮び上れない作家もあれば、ジャンプでもしたやう

に直ぐ飛び上つて仕舞ふ作家もあるといふやうに厄介至極なものだが、これを通過しなければ恐らく川柳作家として生長は覺えないと覺悟しなければならぬ。

然らば川柳の概念とはどんなものかこれは諸君の句を検討して行く内に、それぞれ説明して行くことになると思ふ。

風の音旅の息子が案ぜられ

これが家出した息子だつたり、親不孝な息子だつたら、川柳の概念になる



川柳塔

大 阪 橋 本 緑 雨

二階から見る立話面白し
 稲がみのり雀も多し朝の道
 旅に居て鞆は少し重たすぎ
 葉が落ちる音を火鉢で聞かされる
 今朝もまた出征の汽車見て戻り
 日本髪坊主枕のホテルへ来
 老幼を押しつけて乗つて立つてゐる
 道具類安いもんだと見て買はず
 會者定離それも承知で引づられ

大 阪 西 田 艸 樂

居ない息子を家出や親不孝にまで持込
 んで見なければ、承知出来ないのが、
 川柳的にすれてゐる作家の観方である
 だが一度はそこまで行かなければいけ
 ないのは勿論である。何故なら事物を
 深く見ることの道程だからで、作家と
 して表面だけ撫でて済ましては置けな
 くなるのが作家の作句良心である。そ
 の意味でこの作家に風の音に旅の息子
 を案する親心をもう少し深く見ること
 をすゝめたい。たとへば

風に息子の旅程繰つて見る

といったように（句主ハルピン市松花
 春）

氷屋の旗秋風に淋しさう

秋風が淋しいとか秋が淋しいといふ
 のは敢て川柳しなくとも一般的な概念
 なのである。そこで秋風に淋しさうと
 言ふ表現では對手に何の感銘も與へる
 ことが出来ない、たゞ作家自身の感じ
 に過ぎない。

大版 麻生 葦 力
男の世界覗く眼鏡はこちらです
虫を殺してゐる人ばかりだろか吊革を持つ
尺あてゝ見れば暴君揃ひなり

○

兵庫縣

水谷 鮎 美

梨をむく手に秋の雲ひかるなり
コゝヒのかほりによへばまるき腫よ
腕力を信ずる友のなつかしき

大版

朝田 新 水

時間勵行女にせまる帯の音
猥談へ娘も交じる海の家
純情でない技巧まで考へる
鼻の涼しさ一等當籤
金の蔓放してならぬ實直さ
出征と幾夜寢覺めに指を折る
大版 姫田 夕 鐘
雨だれの續くを見てゐる地藏さん

秋風に氷屋の旗うらぶれる

とてもすれば、氷屋の旗そのものへの作家の感じが詠ひ出せる譯である（句主 ハルピン市ざん君）

あの風がなければ兄も無事なるに

嚴然たる事實に違ひなからうが、後世九月廿一日（昭和九年）の暴風雨を知らぬ人が見たらあの風が判らない。あの風位では兄の無事を奪つたそれとして迫力がない。

兄を奪はれた暴風雨の日の日記

として事實への追想へ焦點を置く手法を選んだ方が、多少の餘情が残る。言ふまでもないが暴風雨はあらしと讀む（句主 尼崎市 紫浪君）

看護婦と並んで風の窓へ立ち

これは完成されて居る、何氣なく詠まれては居るが、その情景、その餘韻すべて難する隙がない、この句境を大切に守つて貰ひたい（句主 大阪市

秋の夜を運針をする娘がひとり
娘の肩はボンとたゞけば崩すなり

靈峰のながれに赤き濯ぎもの

遠足の歸るを待つてゐる鴉

いゝお父さん朝な朝なの乳母車

裏返して見ても薄き座蒲團

大阪 後藤 青兒

公印と新聞とある部長室

内勤は時雨も雪も氣にならず

肝油だイストだマクリだ小學校

長屋でも天に代りて不義を打つ

名古屋 吉田 水車

飛車角が成つてしまつた支那事變

捧げ持つ千人針へ冬迫る

祝上海太原攻略

戦捷へ祖國は菊の盛りなり

謙南坊君

手紙書く留守居の窓に夜の風

完成されて居るとは言ひ難いが、本欄の作家として茲まで課題を扱きければ佳いとしなければなるまい。ただ一讀ごたごた並べられたショウキンドを覗いた感じを與へるのは、作家がすべてを表現しようとしたか、不用意に道具立をして仕舞つたからである（句主 大阪市 貴美子君）

出征を祝ふ國旗が風にゆれ

軍國風景の一點描として情景はキヤツチ出來て居るが、國旗のがと風に揺れが句勢を削いてゐる。そこで

出征を祝ふ國旗は風を斬り

とはためく國旗を強調することも無駄ではない（句主 大阪市 美津枝）

風よけてそつと盆燈釣りがへる

盆燈籠を字數の都合から盆燈と、詠んだのではなからうかと思つたが、盆

大 阪 須 崎 豆 秋

戦 争 の 音 を 立 て る 玩 具 店

日 の 丸 は 汽 車 か ら 見 え る と こ へ 立 て

松 本 石 會 根 民 郎

秋 風 に な れ た 子 の 鼻 す べ ら か く

子 の 枕 あ つ て い さ か ふ 腫 を そ ら し

大 阪 西 い わ を

秋 深 し 極 彩 色 の 姉 妹

ア パ ー ト に 餘 り に 紅 き 鶏 頭 の 花

五 分 刻 に 其 の 眼 光 の 鋭 す ぎ

大 阪 宮 岡 白 峰

人 参 と 軍 馬 と 並 ぶ 街 の 角

行 商 の 足 へ 暮 れ て る 秋 の 日 よ

空 襲 へ 松 は 動 い て ゐ る ば か り

妻 の 行 く と こ は 市 場 と 齒 の 醫 者 と

大 阪 加 藤 ラ イ ト

誘 は れ て 二 對 二 で 出 け たり

燈籠なら鯉轢に使ふ様な高い掉の先へ

吊るのだから、この句の感じでは首肯
けない、この持つそれは盆提灯ではな
からうかとすれば

吊りかへて見ても盆提灯へ風

と風をよける心持を句の裏へ隠す手法
もあるが、盆燈籠でなければいけない
れば

風よけて盆燈籠の吊りところ

として風のあたらないところまで下げ
た感じを詠ふことにしたい（句主 大
阪市 潮花君）

第一線ふと故郷の風が渡み

故郷と第一線を風によつて繋ぐなら
ば、そこへ何かを齎したくなるのは、
私の川柳的概念のなす仕業かも知れな
い。

戦線の風故郷も秋だらう

と砲煙彈雨の閑に故郷の秋の深さを感じ
る兵を描いて見たが、これは想像に

魚釣りの意地一匹へ黄昏れる

金盃鼠も肝をつぶしたろ

編針の個性風呂敷突き貫きて

戀人の最後の言葉情落させ

廣島 鳥生 古弗

皇軍の足音高く午前四時

外出をひかへ梳櫛ふけ多く

金澤 安川 久流美

冷し枕にラッパ遠慮せず

牛乳とパンにきめてる専務室

鶏の米には乞食手を出さず

似た顔の恐れ多くも大臣おごかな

正成は眼鏡をかけてゐなかつた

兵庫 長崎 柳 秀

婚禮の噂も村の廣さなり

ぼんぼりに廣告を見るあほらしさ

水泳着出せば去年の砂が落ち

過ぎないかも知れないことを怖れる。

(句主 大阪市 風葉君)

風吹いて倒れた松で戀語り

倒れて居る松の木ところで戀を語つたといふのは首肯けないこともないが、それが風に吹き倒されたものとは首肯き難い、殊に風吹いて倒れた松でと来ては笑へもしない。そしてこの作家は何故こんなところで戀を語らせなければならぬのか恐らく作者は風に倒れた松を発見したので、そこへ何ものかを點綴しようとしてあれかこれかと物色した揚句戀を語る男女を幻想したに違ひないが、そのまま下五へ持つて來たことは不用意である。風に倒れた松なら松でそれだけを句にした方がよかつたのではあるまいか、たとへば

思出の松は嵐の日から消え

とでもして幼い日の感傷なり、或は戀の思出なりを鑑賞者の感覺に委せた方が賢明だつたと思ふ(句主 大阪市)

○

廣島 植山九天

釣竿の先へ北支の雨が來た
入齒して銃後の意氣を上げるなり
畫線の下で銃後の汗を拭く

今治 渡邊曉童

あの頃を思ふと履歷書がゆがむ
馱首に成つて自分のものは妻と子と

曼珠沙華譽の家に陽が當り

曼珠沙華二階に見える鏡掛

曼珠沙華電車を汽車がおつかける

長野 金井有爲郎

カタ／＼と機銃をおもひ稻を扱く

睡らない子をだいて立つ夜の時計

直ぐに出す紙幣をキチンとたたんでゐ

煙突はミリタリズムに空を塗る

百花燎亂葬儀屋の店だつた

廣島 濱田久米雄

隼人君

斯うして一句一句をつぶさに検討すると諸君の句境が耕されて居ないことに諸君自身も氣がつかなければならぬ、そしてこの處女地へ蒔くよき種子として、關西に住む先輩の句を贈るから、諸君の好きな句を選んで丹精の花を咲かせるなり、實を結ばせるなりして貰ひたい。

春の風生きてし生けるものの幸 翠夢
樹と水に風は刺戟のやうに吹き 文久
だまされて見たい氣も風 九葉
秋風の感觸セルを透き通り 夢魚
白足袋の步調の亂れ 向ひ風 初胡
颱風に病母を背負ひておろす 汀柳
蒙古風雲などが出る幕でなし 青龍刀

以上は宮尾しげを編「昭和川柳百人一句二篇」所載の自薦句から關西在住作家の作品のみを抜萃したものである同書は句と人を同時に知ることが出来る、まことに良書と思ふ。諸君の先輩の句と人となりを知ることとは決して無駄ではないから、是非座右へ備へるやうにおすゝめする。

かたくなり行く送別の辭の餘韻

見送りの中に丙種の顔が見え

出征のおのれを捨てた服を着る

大漁の仕末は妻にまかせとき

鐵道就職十年

こゝといふところで煙草が取り出され

金借りに行く電車賃借りて出る

愛媛縣

今川 柳 影

潮時を狙ひ自信の隠藝

外交員嘘の留守とは思へども

考へて置くとは寄附を斷る氣

今治

矢野 蛇の磨

こぼろぎの夜か夜のこぼろぎか

糸瓜棚晩年不遇の父想ふ

先取權悠然と居るW.C.

夜食案異議無く通過虫が鳴き

圓顔の方がべちやくちや猪も受け

川・柳・書・架

昭和川柳讀本

堀口 堯人 著

▼著者の自序のまづはじめに、

『昭和川柳さは何か。について、なるべくわかりやすく書いてみました。』云々

▼内容は川柳のばじまり、柳橙の話、武玉川の話、川柳當百集について、昭和川柳の誕生、作句の實際、表現法のいろく、結論句は人への八章に、昭和川柳同人選集を附してゐる。

▼昭和十二年十一月一日發行。四六版假綴八三頁、定價三十五錢。發行所大阪市東區伏見町五丁目六一昭和川柳社。

▼手ごろの入門書、一讀を薦む。

白 晝 夢

▼若くして逝ける平井節子さんの遺句集。

巻頭に義兄平井春光君、夫君平井興三郎君の追憶文が掲げられてある。

▼昭和十二年十一月廿四日發行 ▼菊半截四七頁、非賣品、發行人増井汀柳、編輯人行俊紅白



準戰時體制下の川柳

阿 部 佐 保 蘭

關東防空演習も異常なる緊張裡に第二日に入つて、夜來の雨は蕭々として、今更に北支の冷雨を想はせるものがある。私は今豫行演習に入る前の寸時を割いて、出征柳友の身に憶ひを走せつゝ、この拙なきペンを走らせてゐる。

×

×

私は一昨日、S H K 賛助會員榎谷紅ン坊君からこんな印刷物をうけとつた。

初陣さほゝ笑み乍ら髪を剃り日本男子の本懐、私の念願が叶つた此度の應召には熱誠溢る御歡送を戴きまして何んとも感謝の言葉も御座いません。束にして敵を撃つ氣の鐵兜日の丸の元氣で頑張る私の勇姿を御想像下さい。

丸雷も銃後を護る襟掛け

銃後の護りに御健闘下さる貴家御一統様の御健康を切に祈ります。

私は九月七日のあの盛んなる見送りの朝を思ひ出し、明朗、啞三昧、陣居、車山、米花、紅茶碗、雞六の諸柳人と共に叫んだ万歳の聲に今更血の湧くのを覺えた。私は八日締切のきやりの社人吟へ早速句を送つた。

出征の友の手固く握りしめ
神前に誓ふ勇士のうしろつき
出征の友を送つて乾く咽喉
このウ井ンドも出征を祝す文字

赤ん坊を軍歌であやすこの頃
出征の兵士憶へば云へぬ愚痴

×

×

私は今朝同じくS H K 會員の清水淳吾君から八月五日見送り以來始めての消息に接した。

露營に結ぶ夢も十數日！日中は酷暑乍ら血生臭き戦場の巷にも朝夕の秋風が訪れました。

私は今、上海の東部前線揚樹浦路のま云ふ處で陸軍部隊との共同戦線下に約二千米の地點に

陣地を構築してゐる支那中央軍二十萬の兵と相對して居ります

×

×

世界の都、豪華なる上海の街も空爆に砲銃彈に依つて起つた火災の爲、今は昔の面影なく灰燼に歸し、凄慘を極めて居ります。焼けた建物の中に、崩れた道路の土囊の影に跳躍する便衣隊を打殺すのも中々小氣味良いものです。

×

×

幾度か敵の空襲にも遇ひ、敵彈の下をも潜つて來ましたが、未だ身には微傷だに受けずして元氣旺盛です。御放心下さい。既に不幸敵彈に名譽の戦死を遂げたものもあり、負傷して涙を呑んで内地に送り返される者もあります。無念やる方なき戦友の其の姿は涙なくしては見られません。生きて凱旋出来るのも敵彈に倒れるのも全ては天命！皇國の爲、陸戦隊として第一線

上海の槍舞臺に活躍出来る私の武運を欣び力の續く限り奮闘致します。

私、○隊本部指揮○隊に配属

し。○隊長副官の助手として戦國記録等書くのに忙しく、花々しき戦國ニュースも容易にお送りすることも出来ませんで不愚

× ×

パンを走らせてゐるこの間にも黄浦江上の我が軍艦から打出す砲の音、飛行機の落す爆弾の響き、豆をいれる様な小銃機銃の響き、これ等も既に覺悟を決めた今に至つては痛快なる音楽のリズムの様に聽えて來ます。大いに頑張ります。皆様に宜しく御機嫌よう。

九月九日 於上海 清水淳吾

私は只我が柳友の武運長久を祈り、一日も早く暴支膺懲の目的を達し無事凱旋の日を心から

祈りました。

爆弾も音楽と聽く頼もしさ
たい友の殊勲と無事を祈る秋

ツブしてみる事にする。

極道もいざ出征さなる笑ひ

新 水

船の旅

温泉へ

別府線で
勝浦線で



大 阪 第五 時 發
神 戸 同六時四〇發
和 歌 浦 同九時四〇發

(一日で那智、下呂訪問)
(翌早朝那智)

大 阪 商 船

— 呈 進 書 内 案 —

×

×

私は川柳雜誌九月號の中から
準戦時体制下の川柳をピックアップ

召集令待つてゐるそこを通りす
街の風陳列にある日本刀

鮎 美

笑ひ話へ千人針が通るなり

夕 鐘

燈火管制虎刈りにして貰ひ

豆 秋

千人針日本女子の顔になり

同

馬に草やるを忘れず兄は征き

變 人

兄の征く肩身の廣き驛を抜け

同

子を抱いてもろて千人針を縫ひ

同

召集の椅子二つ三つ空いてあり

い わ

千人針の中を通つた胸さわぎ

青 兒

郷を發つ感激死んでよい覺悟

可 宵

軍刀の重き炎暑を突きわけける

九 天

苦しさの中にゆるむが趣味をもち

久 米 雄

戦勝へニュースはありつたけ

久 米 雄

の聲

最後に「SHK」創刊號に書いた編輯後記の一節を誌してペンを擱く。

「戦争文藝としての川柳が愈々活躍すべき時が来た。我等銃後の川柳人の務めは本業に精勵すると同時に我が宗教とも云ふべき川柳の道にも併せいそいで冷靜なる態度で善處して行く處にある。これが引いては盡忠報國の道さなるのである。世界の耳目が今や日支に集中されてゐる時こそ三大強國の一たる餘裕を示し川柳の世界的進出を實現し川柳を通して國際文化親善を圖るべきである」戦争に勝ち乍ら外交に負け勝ちだつた日本の心すべきはもつと諸外國の日本に對する認識を深めるやう色んな方面から銃後の人々が努力して行くべきである。我が川柳識譯研究會もこの點に留意

して大いに川柳を海外に示すべく努力する積りである。

(二二、九、一六)

へそくり帳

菊田 夕 鐘

田舎には珍らしい立派な新築を、つづ素人の妻君が宿屋を始めた。木の香も抜けきらぬ



貴様のいゝやうにしろと嘆詞を切つた。呆氣にさられたが折良く通り合した巡査に來てもらひ警察へは送つたが自分も呼び出され、色々と前後の様子を問はれ、宿帳を見てゐたが君とこは此れが初めての客かとの問ひに初めてであること告げるさ警官も苦笑しこの男は前科六犯だといふことを聞かされた。半日以上も留め置かれてがっかりして歸つて來た妻君は宿屋を續ける勇氣を失つてしまつた。

新刊紹介

小はなし研究 (十二)

漫畫家で凝り性で古典趣味の愛好者宮尾しげを氏の編輯である東京市豊島區東鴨六ノ一二九〇小瀬研究會の發行。定價一部參拾五錢、郵稅參錢。

皇軍さながら
病魔を撃滅!

醫學博士數十名推薦
大學式

赤外線子宮保温器

定價八圓六十錢

婦人病 血の道
冷急症 月經痛
無月經 こしけ
不感症 不妊症

大學式 赤外線應用研究所

電話櫻川(一五六二番)
七〇二八番
掘替穴阪九五六五番



★ 柳人素描

(一三) 村松夢裡君

孝養の人として知られてゐる村松夢裡君はいつでも、誰にでも、ポライトである。こればかりは誰にでも出来そうで、誰にでも出来ない美德であらう。日本樂



器大阪支店にあつてソロバンを弾くこと二十年、日曜と云は

ず、夜と云はず仕事に疲れるさういふことを知らぬらしい。

君が川柳に興味を持つやうになつたのは昭和六年七月だそう。

隣りは普請場金だ金だよ
春の夢眠りさもない子を寝かし
がその句風だ。

君は長野縣上伊那郡高遠町の産、真治郎(りようじろう)はその本名だが、通有(みちなり)と改めてもう二三年になる。

師走川柳大會を開催

本協會の主催で十二月三日午後六時から大阪朝日新聞社三階大廣間に於て同情週間の催物として別欄廣告の如く師走川柳大會を開催する事となつた。

本會は大阪朝日新聞社會事業團の後援と京阪神川柳人の來援によつて賑々數開催される運びとなつた。時恰かも防空演習中の事として、その準備には大いになやまされたが、歳末に特に恵まれぬ人々のことか考へれば如何なる困難にも屈せず、大會委員は大車輪で豆ライトの僅な光りによつて協議をするなど、川柳人の人間味を遺憾なく發揮した。

川柳講座二巻出づ

前田雀郎氏が絶大の努力を拂つて監督してゐる川柳講座の第二巻が出た。本巻の内容は新興川柳講座(渡邊良規)現代俳壇論(伊藤鷗二)川柳と能樂(松本龜松)新川柳名句評釋(明治篇)(大谷五花村)古川柳名句鑑賞(二篠原春雨)川柳雜誌研究(一)(森井荷十)川柳俳諧書解題(二)(額原退藏、宮田正信)連句の研究と作法(二)(江副浦郎)現代作家論(二)(品川陣居)課外川柳人國記(二)等である。



望 展 界 柳

全國川柳界のこゝ、各地川柳人の一舉手一投足をこの展望欄ですぐわかる様にしたい。皆様の御通信を歓迎する。

催

▼大鐵畔柳社は十一月四日久しぶりで句會を開かれた畔柳社諸君の熱を大いに期待して止まぬ

▼福田山雨樓君(横濱)が久々で來阪されたので、これを機として不朽洞會を十一月二十七日、カナメ食堂樓上に開催した。川柳創刊時代からの顔ぶれ多く堅く手を握り會つた事はうれしかった。

▼川柳研究社、川柳柳友會主催の愛國獻金句會は十一月七日午後六時より國民新聞社

四男二女がある。趣味としては釣に殊殊川柳雜誌社不朽會員、川柳雜誌社御池橋支部同人、川柳人協會評議員。

(一三) 水谷鮎美君

鮎美(あゆみ)さんくと友達から親しまれる水谷鮎美君は仕事にかけても精勵格勤だ。川柳雜誌社梅田支部の幹事を引きうけては水も洩らさぬ統率振りで會社から表彰されたといふ變り種。公私をハッキリさせる



のさ情誼

に厚いのが君の身上である。大正十五年の六月から川柳の門を潜ぐつた君の句風は既に鮎美調をなしてゐて有名である。路郎門の一異彩

幻は消えて欄間の佛達

君雲を話す心になり給へ

おちついてゐれば鼠にのぞかれる

君はあせらないで、人生の波に乗つて行くことを知つてゐる。鮎美君は明治三十三年二月五日生、姓を水谷、名を信雄、別號をひかり莊、吟洞と稱し職を阪神電鐵の運輸課に奉じてゐる。兵庫縣武庫郡大庄村に居を構へ、一男二女の父である

會議室に於て開かれた。

▼川柳同人社第一週年記念大會は十一月三日午後五時洛北船岡山建勳神社東館に於て開催された。

▼川柳國松島會は十八日夕刻より松島道徳會說教所で開かれた。

▼有恒俱樂部に有恒川柳會が産れ、路郎主幹指導のもとに毎月二回句會が開かれる事になった。其第一回の句會が去る十六日に開かれた。第二回の句會は二十三日に開催された。

▼松坂屋松坂俱樂部の趣味道場で毎月二回路郎川柳講座が開かれる事になった。第一回講座は二十日夕刻から開かれた。月謝一ヶ月壹圓。

消 息

▼山根泉人君(松江)は松江市役所を退職され家業に従事されてゐる由。

▼北國夕刊新聞新年文藝募集川柳の選者は安川久留美君(金澤)題は「千人針」。

▼安川久留美君(金澤)は森田一二君(盛饒森の家)からの依頼で「終電車一人になつた寒さかな」「弱いのめ苛め鴉が煙を取り」の句を揮毫された由。

▼金田並木君(大阪)は病院から健康そのものゝ如き寫眞を送つて來られた。

▼石曾根民郎君(松本)は信州憧憬者の蔑乃女史に宛て、信州を翻譯した詳しい便り多数のパンフレットを寄せられたので女

史大よろこび。

▲山本喜山君(大阪)は大鐵支部幹事を正本水客君(大阪)と交送された。永らくの御盡力を謝す。

▼宮本夢一文君(青森縣)は眼病で加療中との由一日も早く御快癒を祈る。

▼安川久留美君(金澤)から「秋蛙が鳴く」をあいも歡待されるのであれば久留美の名で發表してもよかつたのだつたとの葉書が本社へまひ込んだ。

▼池澤樂居君(大阪)は松坂俱樂部趣味道場之路郎川柳講座のパンフレットへ路郎主幹の名推薦文をお書き下さつた。

▼月原智朋君(上海)から上海上陸の第一信を受け取つた。上海にはひさりの支那人も居らぬ由「上陸第一の夢は何處で見るやら」「黃海が無けりや日本の上海だ」を書かれてあつた。

▼大谷五花村君(福島)は道柳しん平、松田晋風、宮都榮芳の諸君と白河に遊ばれ本社へよせ書を送られた。

▼大鶴喜由君(大阪)はしばらくお便りがないので案じてゐたところ心臓病との御通知に接した。充分の御静養を乞ふ。「淋しさ意見を吐け役がつき」その同君の句によつて病中の御多忙をお察し申上げる。

▼村松夢裡君(大阪)は去る十一日商用で高松へゆかれた。途中内海の風光を讚美された短歌にそへて「御人柄見せて靴下破れて居」さあつた。用意周到なる君にして時

川柳外の趣味としては歌舞伎観劇、ひざり旅、霊場めぐりだそう。川柳雑誌社、不朽洞會員、川柳雑誌社梅田支部幹事、川柳人協會評議員。

(一四) 加藤文辭君

加藤文辭君、本名は文雄(ふみを)、生れ落ちると間もなく、愛知縣中島郡祖父江町の加藤家にも



藤家にも
られた
のだそ
うだ。生
れは東京
だといふ

外詳しいことは本人も御存じないらしい昭和十年の十一月まで祖父江町で料理兼旅館を業としてゐたが今は名古屋に移り住んで富國徴兵保険の名古屋支部を引きうけてゐる。蒲柳の質に似ず猪突的な斷行力の把持者でもある。

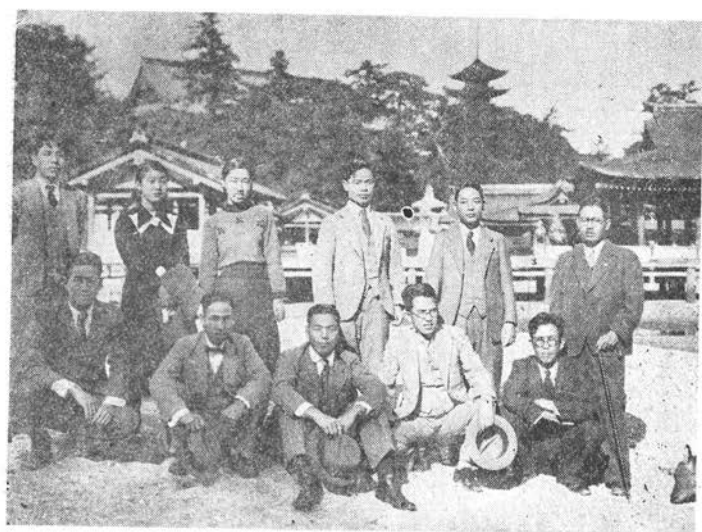
彼が川柳に手を染めたのは昭和二年四月だとのこと。その作に

入學をして父のない事に觸れ
迷ひ子を夫婦は別な氣で眺め
がある。いづれも實感の匂らしい。

趣味としては寶船の蒐集と旅行だ。聽く。名古屋趣味家聯盟會員、寶船乗合會會員。川柳人協會正會員。

にかゝる事あり人多忙なるかなである。
▼酒井大禮君(松山)は十日面河溪(遊ばれた。虎ヶ瀨下流の絶景スタンプ附の葉書によせられた。「大面河鉄くべからすのフ

殿島吟行(川柳廣島支部)



ルコール」とあり。偶然たる君を欣ぶ。
▼螢ヶ池の丸橋松雨君(豊中)から、愚龍一更、宵鬼の諸君等と相變らず川柳に精進してゐるとのお便りに接した。嘗ては特異性ある優秀作家を出した螢ヶ池の往時を憶ふ。

▼等崎虹絮子君(愛媛縣)は今夏以來御病氣であつたが、此程快癒されたので大いに作句に精進される事であらう。

前
列
向
テツ
右
リヨ
列
向
テツ
右
リヨ

▼明石柳次君(京都)は近頃御商賣繁昌の由まことに結構。

▼丸尾潮花君(大阪)は今後岡町支部幹事として活躍して下さる事となつた。

▼黒川紫香君(大阪)は旅行部員と川柳部員となり成る鐵足會の會長でなか、忙しいからだではあるが、よく川柳に盡くされてゐる

▼福田山雨樓君(横濱)は十八日下關へ旅立たれた。阿蘇からお頼りをいた

いた。

▼月原宵明君(上海)より戦地からのお便りがあつた實感まのあたり見るやうである。(四十四頁(續く))

久米雄、至宏、松風、草雲子、香月、天九、昇玉、紫浪、己未子、麻子、星州

清 酒

白鶴

ハクツル



元壺發
社禽名合納嘉

天泰・連大・川仁・城京・戸神・京東・阪大

恩給の額を近所で噂され
 恩給を取つて豪酒がちつとへ
 恩給に辿りし荆の道を見る
 恩給で建て借家にケチが入り
 釣竿をかつぎ恩給羨やまれ
 恩給を受取る女文字淋し
 恩給に事足り老の菊作り
 恩給で餘生を送る村はずれ
 恩給へ浮世を捨て趣味に生き
 恩給のおかげも受けて妻は死に
 恩給は今日も感謝の義足履く
 恩給が有つて草鞋の旅がすき
 晩酌の話恩給の事にふれ
 恩給は金のかゝらぬ趣味にする
 恩給に近く引込み思案なり
 恩給を献金 齡まだ老ひず
 恩給の手前寄附は断はれず
 あと一年の恩給へ弱い體なり
 恩給に頼る淋しい年を取り
 恩給を貰ふ父なり病つゞけ
 恩給を貰ひ故郷は好いところ
 恩給をおし頂いて居る心

水客 南渡路 和夫 流業 ライト 白峰 政彦 春坊 美津枝 南海男 沐天 葉光 斗風 曉童 春巢 紫香 市他樓 美知夫 同 松大樓 同 五扇子

道樂もなし恩給に頼り切り
 恩給に生きて世間に遠ざかり
 恩給の前に控へて病みつゞけ
 恩給のそれから先は村の世話
 恩給の主人裸で客に會ひ

同 菊路 同 文庫 同
 恩給へ野心すつかり捨てた顔
 恩給へ世相慌く變り
 恩給に近く陶器枕にし
 (人)恩給を受取るだけの印となり
 (地)信仰に生きて恩給だけの慾
 (天)佛壇の花生々と恩給日
 (軸)恩給者棋譜對座の日が續く

都之介 潮花
 五扇子 沐天 曉童 春巢 鮎美 無煙 大樓

典雅な日本座敷

北理料 白蘭

土佐堀船町

院長はめつたに來ない精神科
院長は只隠くばかり脈を執る
病氣には觸れず豫算を云ふ院長
院長のごち好いのか妓が惚れる
妓のカルテ院長一應眼を通し
院長も折には父に叱られる
院長へおきな馴染は口が過ぎ
院長の下手な將棋に待たされる
院長もぼんやりさする時がほし
院長は廊下の埃見逃さす
院長が歸つた顔にみんななり

不朽洞句會（大阪）
背廣着て柵下駄で来る喫茶店
たばこの灯背廣氣易う寄つて来る
背廣服金は裸で鳴つてゐる
叩かれて背廣つまづきさうに行き
背廣着て午後五時までは買はれた身
務めかた趣味へ背廣の夜が長し
味喰汁のにほひが残る背廣服
背廣服ぬげば萬才師に似たり
反抗をせよとは育てない背廣
親の恩わかりかかつて来た背廣
（軸）背廣着て鞭を持ってだめの身
出張の父の土産を信じきり
マドロスの氣で出張の夜を歩き
出張は登山した事抜いて書き
出張へまだ大阪は宵の口
出張は先づ制服で門を出る
秘書さして出張してるタイピスト
おいそれとはいかぬ出張命ぜられ

同方正
同秀
同柳
同たけを
同山彦
真郎三
路郎三
里十九
路郎三
乃樂
同艸
同青兒
同夕鐘
夢裡
葎根
山雨樓
里十九
同鮎美

出張の窓尼寺の柿が見え
同　青　兒

出張は子供的事も言つて出る
同　同

出張の電話は根掘り葉ばり聞き
同　同

出張へ古郷の秋の水清し
同　同

(人)出張をして漬物の味をほめ
い　わ　を

地)出張の疲れ枕から落ちてゐる
夕　鐘

(天)出張の背中へ秋の風があり
白　峰

(軸)出張がいつか名残りを惜しむ仲
路　郎

(袖)四捨五入して出張費合はしどき書
同

維川岡町句會(大阪)
十月三日　黒川紫香報
通天閣、動物及園内風景、旗、
街、ハイヒール

寛いで通天閣の灯を見つけ
呑　水

通天閣斜にわけであてがなし
水　客

通天閣待つてる母の小さく見え
曉　香

團体の旅のよんでる通天閣
春　坊

大丸で通天閣を教へられ
紫　花

悪魔猿標本として殘される
潮　香

長々寝てあしかの無風流
水　坊

大海を思ふあしかの目が細し
水　客

FUELトで緋熊の檻へのび上り
潮　花

占領の日の城頭に日章旗
酔　花

皇城へ高い所に日章旗
稔　幸

日章旗北支の空を押すのみ
な　ま

落書き(日の丸だけ)、うまく書け
幸　草

族旗、兵隊さんの泊る街
風　葉

先頭の旗は河原へ下りはじめ
水　客

旗書けば日の丸にする男の子
同　同

十月一日
於長圓寺

吉田水車軌

蟲、發展、松茸、ネクタイ、化粧

の聲をラザカで知つた轡蟲 妻

遠くで虫が啼いてゐる

八が終つて元の虫の聲 正

呆けを喰けるやうに虫か鳴き井

つれたる子守へ生か囀いてゐる

の度、一人毛糸の夢りて三

の衣が一毛糸の捻りて
庭の虫に聞き入る哉思ひ
と

の
日
を
寄
合
ひ
に
す
る
發
展
會
七

車
地
分
な
う
な
ら
う
そ
う
か
り
も
う
ば
け

びて行く街白粉の香が流れ

讓地豫定通りバスが伸び正

展會商賣替へを強ひらたるか

んなにも飲み屋が出来た街はづれ鮮

店にされたが、運のつき初め

街になつたと見て、高架線

屋會館の男子草子に

[illegible]

[illegible]

四斗樽のいし勝たん哉主義
 勝つた夜の空氣の動く合宿所
 殉職の墓はれて渡り始め
 波り初深田を悼む聲が洩れ
 大橋が出来て二橋の朝顔出来
 二十才台正義の人にくみたり
 二十才台ミタリズムへ胸を張り
 感激が酒になつて二十才台
 二十台行手さへさるものなし
 支那兵は漫畫になつて戦争し
 笑へない漫畫も見える時局號
 里芋はどの參議の數や馬肥す
 蔣介石の漫畫よ秋なすびよ
 梅田支部 川柳風呂
 續その二
 西 瓜 水谷貼 美報
 敵へ西瓜をきつた晝かり
 市場から西瓜が重い簡易服
 女房は歸る西瓜冷てゐる
 氷蔵から起きると西瓜冷えてゐる
 氷西瓜天神祭は宵の口
 桐一葉日本人をさびしませ
 澤庵の味日本人だけが知り
 墨痕にあざみ日本人の晝
 朝風呂かうれし日本人の腹
 日本人神を信じてやまざりき
 川 柳 風 呂
 嚴島支部 嚴島吟行
 十月十四日 於嚴島錦水館
 鳥居の上晴れ、裏口、自炊、號外、
 大鳥居お上りさんばか、へ見
 おみくじは鳥居の前で捨てられる
 星昇 州玉

秋の月鳥居の上に出て引けり
大馬路二人居て歩み揃ひ
幸運の二人鳥居が高く見え
軍刀の位置を正して大鳥居

(宮島にて)

外人に（烏島の由來聞かれたり）
ハイカーがコースを變へた日本晴れ
半鐘が退屈そうな日本晴れ
日本晴れは寄つて故郷のこと
日本晴腹の底から軽くなり
無花果が開けてゐる日本晴れ
日本の晴れば隣猫があるばかり
驛名のハツキ見える日本晴れ
口笛の輕さも日本晴れの朝
裏口で今日のお菜がうかべられ
裏口で主人ブラシのまいで立ち
裏口にマッパを借りる御用聞き
裏口へ心得顔で八百屋来る
裏口へ廻る主人の年忘れ
おい起きろ自炊當番飯をつぎ
退廳の自炊に廻るとこがあり
二つ三つ重なってゐる出前箱
自炊してハウスキーパー欲しくなり
自炊する友は市場で步ぐにぶり、
婚禮の日刊にある片田舎
號外の朝刊にある片田舎
引き破るやうに號外取つて讀み
號外が忌中ける様に辻を折れ
皇軍の外も威風凛々音高しき
號外の足も事變の氣に燃えて
號外の子供は箸を持つて立ち

已未雄
星州雄
久米雄
紫瀨雄
天玉
同昇
九松
升玉
昇天
風雲
松昇
星州
久米
紫瀨
天玉
昇玉
香月
星州
松雲
草雲子
屏玉
草雲子



横 縦 輯 編

▼支那事變や防空演習で、心の落ちつきが失はれてはならない
—國民精神總動員といふ言葉は事變に處する心構へだけではな
い筈だ。銃後には銃後の川柳が
あるべきだ。どこまでも戦ひ抜
くことだ。

▼御心配をかけた私の手の痛みも執筆に差支へぬ程度になつたので、毎日柳務にいそがしくしてゐる。遅刊は申譯のないことだが、原因の一つ宛が除去され
てゆくので、今暫くお省しが願
ひたい。

▼川柳漫書はいろ／＼な意味で愛好されたり、非難されたりしてゐる。しかし川柳の名が大家に知られるのに、役立つたことは否めない。川柳家も川柳漫書
を非難する前にもう一度考へて
見る必要がないだらうか。本號

で「川柳漫書に寄す」を發表したのもこのためである。御多忙の中を特に寄稿せられた漫書家並に川柳家各位に深謝する。なほ自分としては川柳漫書は川柳を漫書で説明するといふ從來の行き方から少しく離れて川柳漫書としての特異な存在を示すに足るものが生れるのがホントではないかと考へてゐる。

▼大阪朝日新聞の社會事業團から歳末同情週間の義金を募る目的で川柳大會を開くことゝ依囑されたが、コレは川柳雜誌社で舉行するよりも、川柳人協會の仕事として、うつてつけのものなので、川協年中行事の一つとして川協に譲ることにした。川柳に關心を持つ方々の御支援を切望する。

▼川・雜の年中行事だつた京阪神支部聯合主催の忘年川柳大會は時節柄でもあり本年は舉行を見合はせ、川協の「師走川柳大會」を應援することに決定されたので、各支部の方々は費用や賞品にあてるため従来御寄贈下さつた金員を「川協」の方へ御惠贈願ひたい。そうすることが

川・雜・案・内

六號字十四字三行金五十銭、一行増すと
に金十銭、但し前金切手式用可、行増すと
改題、移稿、句會案内、柳務報告、その他

川・雜・句・箋

「川柳雜誌」への投句は構形の美しい投句用箋をお用ひ下さい。

句の書き心地もよいし、選者が選句されるのにも、便利なので特におすゝめいたします
送費は本社で負擔いたします

八十枚綴 一冊 金十五銭
二冊 金廿五銭
御申込は川柳雜誌社へ
切手代用も可

麻生路郎編著・柴舟漫書

累卵の遊び

四六版一六〇頁・函入・漫書三十二篇

川柳の妙味を骨を折らずに味つて貰ふつもりで噛んで碎いて擲り餌にしたのが「累卵の遊び」であることは著者の序文の一節である

發行所

大阪市西成區
玉出本通三

不

朽

洞

堀替穴阪三〇三九二

染筆頒布

路郎先生筆、掛軸、横額小物、短冊を川柳家に限り左の特價で頒布致します

軸箱入二十圓・額二十圓
小物五圓・短冊三圓
御申込は前金で川柳雜誌發行所へ

合本特賣

川柳雜誌の合本自第二卷至第十一卷、各金壹圓五十銭
第十二卷、各金壹圓五十銭
送料大阪市内 一冊六銭
市外 一冊七銭
御申込は前金で川柳雜誌社へ

残本分譲

川柳雜誌の残本分譲申上ます
第二卷より第十二卷迄一冊十銭
第十三卷 一冊十五銭
御申込は前金で川柳雜誌社へ

定價 壹圓
特價 八拾錢
送費 九錢

川柳を一層大きくすることにもなるので特にお願ひする。

▼塚越正光氏擔當の「指導講座」欄は一ト先づ本號で打切ることとした。講師塚越氏の勞み多とする。

▼前號で「川柳塔」を一段組みにして見たか少し延び過ぎた感じがしたので、更に三分の二段組みにして、天地み揃へずに組んで見た。これなら落ちつくだらう。(路)

社 告

▼川・雜大鐵局支部山本喜山君が幹事を辭され、その後任幹事として正本水客君が推薦されたので同君が新に幹事に就かれた。

▼川・雜岡町支部も開設した。幹事は丸尾潮花君が推された。▼漫畫家北幹夫君が入社され編輯部で活躍されることになった。

年 賀 廣 告 を 募 る !

年賀廣告は柳人交驛と御後援の意味で特におつきあひ下さい。

▼御芳名掲載料 一口 金 一 圓

幾口でも申込んで下さい、一口分原稿はなるべく簡単に願ひます。

▼申込期限 十二月廿五日(厳守)(新春特輯號に掲載)

▼一頁御希望の方は特に御相談申上げます。

▼廣告申込は成るべく振替御利用の上前金でお願い致します(三錢以下の切手代用可)

川 柳 雜 誌 社
大阪玉出本通三・振替穴阪七五〇五〇番
川 柳 人 協 會
大阪玉出本通三・振替穴阪三一五一四番

「後の葉柳」を頒つ樹形四頁三部十錢、切手代用二錢五枚
川 柳 雜 誌 社 宛

「大正川柳」第五一號及び第五八號相當の代價にて譲受けたし
川 柳 雜 誌 社 内 B B 生

漫畫で出来ることなら何んでも大阪筑前橋電停前昭和ビル電話土三三三漫畫宣傳社

化粧 懸賞川柳
新聞社

課題「古領」十二月十日
用紙は官製ハガキ(化粧柳壇と明記の事)選者麻生路郎氏秀逸數句に瀟灑を呈す大阪西成區玉出本通三麻生路郎氏宛
麻生路郎

川柳講座

初心の方々はお越し下さい十二月第一、第三日曜午後六時
松坂俱樂部
趣味道場

櫻井齒科醫院

東區松屋町農人橋筋北
電話東五三一二番

川柳を作る人愛好する人の必讀
誌毎月一日發行一部廿錢送料一錢

川柳俱樂部

東京市牛込區揚場町八
川柳俱樂部社

東海の 川柳草薙

代表誌
一部一〇錢一年一圓(郵税共)
名古屋市南區八熊町
寺田一五〇
發行所 草薙川柳社

川柳さやり

菊判每號七十數頁
毎月一日發行一部廿五錢
東京豐島區高田本町二ノ一四六八
川柳さやり吟社

京

一部十錢 一年一圓
京都市西木屋町四條下ル
發行所 京都川柳社

月刊 川柳 みちのく

一部十五錢一年一圓五十錢
青森縣黒石町
發行所 川柳みちのく吟社

(三十二頁の續き)

▼小林不渡人君(青森)よりみちのく吟社一同のよせがきを頂戴した。

▼戦場で片手を負傷された松本文太君(上海)から「萬歳も云えず白衣でお茶を受け」「一句今浮ばぬままの發車ベル」を記された葉書を手にした。

▼庄万よし君(大阪)は市會の御用件で上京され、「半日の議事民族のことばかり」「陳情へ外套脱ぐ間のありはあり」「あの時の跡かと話す應接間」「水源地鴨の種類も説明し」「團服は檜並木に列をなし」の句をよせられた。

弔

▼舊「百万石」の同人 淺田紋二郎君は十一月三日逝去された享年四十六才謹しんで悼む。

轉居

▼富士野鞍馬君東京南麴町區五番町七番地

▼正木琴舟君は東成區北中道町一丁目八高井印章店方へ

▼島山一步君は西宮市外甲風園住宅地第三號地七五へ

▼秋山古心君は小倉市中津口井筒屋寄宿舎へ

改號

▼岩橋岩石君(大阪)は最美地を改號された、

アサヒビール



大日本麦酒株式會社 達用御省內

投稿規定

▲投句は本社發賣の投句用箋、官製葉書又は同型の厚紙に各種各題必ず別紙に認め、住所氏名雅號を明記する事。

▲「近作柳樽」は全作家の雜吟を募る。

▲「川柳塔」への投句は川柳人協會の役員に限る。

▲各地會報は半紙判原稿紙に清記の事

▲文章は二十字詰原稿紙使用の事。

▲書體はなるべく附書「川柳雜誌原稿」に封筒に朱記の事

▲締切は嚴守されたし。

▲投稿其他につき御問合せはすべて返信料封入の事。

募 集

第十五卷 第一號課題

十一月廿日締切

(十句以内)

日の出 前田五健選
パイプ 市場沒食子選

第十五卷第二號課題

十二月十五日締切

(十句以内)

丸帶 池田可宵選
ゴムバンド 阿部閑生選

每 號 募 集

近作柳樽(雜吟) 麻生路郎選

各地柳壇(會報)

文章(評論研究感想吟行漫文漫畫)

價 定

一 部 金三十錢
半箇年前金(特輯號共)壹圓八拾錢
一箇年前金(特輯號共)三圓六十錢

料 告 廣

本誌への廣告に就いては發行所へ直接御一報下さいますれば御相談に應じます。

○御送金は振替口座大阪七五〇五〇番へお拂込みになるのが一番確實です○歸代受領は送本によつて御承知願ひます○送本封紙に前金切の印ある時は直に御送金下さい○御希望により集金郵便を差立てますが御不在中でも頂ける様に願ひます。但集金郵便(一年分)には定價の外に手数料十錢を申し受けます○御注文には何月號よりと御指示願ひます○轉居又は改號等の節は舊新併記の事

昭和十二年十月廿五日印刷
昭和十二年十一月一日發行

第十四卷 第十一號
(毎月一回一日發行)

大阪市西成區玉出本通三丁目三六番地

編輯兼發行印刷人

麻生幸二郎

大阪市内西成區玉出本通三丁目三六番地

禁

發行所

川柳雜誌社

載

支社

東京市蒲田町女塚町二〇三
川柳雜誌社東京支社

店書捌賣

(大阪) 大賣捌大賣書店 參文社 明文堂 朝日ビル書店
其他 市内各書店(東京) かん東京堂 かん嚴松堂 かん吉岡書店
あき玉森堂 かん組伊國屋 かん三味堂(神戸) 米田實文館(函館)
石塚(京都) 三宅(名古屋) 靜觀堂

安産のために ブタカルシウム錠

なぜ………

………母体は………

………疲弊するか？

胎児の劇しいカルシウム要求と食物よりのカルシウム攝取不足は必然的に母体を疲弊に陥らしめ、妊娠中多発する母子体の諸種の疾病は實にかゝる所に重大原因をもつてゐる事は醫學界に認むる所である。

大阪帝大教授片瀬博士は多年之が研究に没頭され、母体のカルシウム攝取によつて妊娠分娩が安全に經過し、且授乳期に偶發する母子体の疾病を預防し乳質を可良ならしむる事を實驗されたがわがブタカルシウムこそは諸妊婦に必要な不可欠の常備藥でなければならぬ

榎林醫學博士 推奨
片瀬醫學博士 監査

妊娠の方へ急告

新案 特許 安産メーター進呈

正しい分娩日が一と目で判る安産メーター及び大阪帝國大學教授醫學博士片瀬氏通安産のためにの冊子ハガキにて申越次第無代進呈

元 賣 發

店 商 助 卯 田 和 町 修 道 阪 大

菊正宗

宮内省御用達

株式會社

本嘉納商店

貸室有リ！

(十圓から
百圓まで)

▼事業機關の中心地帯
▼利便と至廉が其特色

女「ビル時代ですわネ」

青年「そうですも」

女「家庭とビジネスを劃然と分離しな
くては……」

青年「そうですも」

女「でも、いいビルがあるかしら」

青年「それは僕にお任せ下さいだ。朝

日ビルに近くてお値段が格好で、

女「昭和ビルのことでしょ」

青年「ソレ、貴女は頭がいよ」



昭和ビル

筑前橋電停前

電話 三三三
三六一八
四六一八

々人の係關社

(順はろい)

不朽洞會員

★山永西高橋不
本田田田田橋本
丹里田山橋本
路十艸雨樓線
九樂樓る雨



川柳雜誌社

主幹 麻生路郎

吉市村姫朝永北岩
田場松田田谷山崎
水没夢夕新鮎椿柳
車食子裡鐘美郎路
宮後西松春須大妹
岡藤下元崎西尾
白青い小紀豆八變
峰兒わ柳太秋歩人
鳥加近江原大中西石
生藤藤戸鵜鷗西管
古ライみ史喜お根
弗イトる風由き民
弗

長長長田嘉笠片岡大長池
野岡崎中納原本道谷澤
晴牛柳辰路直弘川一樂
濱太郎秀二純生方平雄徹
沖鳥伊客
野山藤員
岩一彦
三歩道
高生谷田米川川龜小大
尾方脇村村上井川西大
亮敏素孝あ三井長五島
雄郎文介馬菱太辰武郎溝
森小林藤蛭篠柴食前前窪
東林里子原谷滿田田川田
魚人不好省春南五雀久銀
人古二雨郎北健郎留波樓

事幹と部支

岡町支部(豊中市)	名古屋支部(名古屋市)	兵庫支部(神戸市)	臺中支部(臺中市)	十三支部(大阪市)	伯耆支部(鳥取縣)	光笑支部(廣島縣)	今治支部(今治市)	光里支部(大阪市)	西條支部(愛媛縣)	大鐵局支部(大阪市)	松江支部(松江市)	御池橋支部(大阪市)	鶴町支部(大阪市)	天王寺支部(大阪市)	御旅支部(大阪市)	松山支部(松山市)	藤川支部(鳥取縣)	田邊支部(和歌山縣)	梅田支部(大阪市)	高知支部(高知市)	函館支部(函館市)	九三支部(函館市)	道頓堀支部(大阪市)	
丸尾	吉田	濱田	宮内	淺野	松井	永田	渡邊	市邊	竹内	荒井	正本	勝谷	宮岡	須崎	江井	酒井	中島	尼崎	辻	水谷	國澤	龜井	北山	庄萬
潮花	米雄	陽幸	耕期	牧人	美笑	美笑	曉童	見子	賀夫	水客	水客	川兒	白峰	豆秋	大樓	鐵州	綠之助	左馬	春水	美水	辰修	悟郎	し	

通開線架高道鐵海南

な利便おすますま

屋島高海南

てしと心中の通交と物買お
すまげ上願程の立引御層一

業休日曜日・業營迄時九間夜

屋島高南海

ばんな・阪大

